

九州アメリカ文学会第 68 回大会プログラム

期 日：2023 年 5 月 13 日（土）、14 日（日）

会 場：鹿児島大学稲盛会館 キミ&ケサホール
(鹿児島市郡元 1 丁目 21-24)

<第 1 日目> 5 月 13 日（土）

開会式

13:00-13:10 竹内 勝徳 (鹿児島大学・九州アメリカ文学会会長)

研究発表

13:20-14:00 高橋 勤 (九州大学・名) 司会：江頭理江 (福岡教育大学)
「テロと暴動——アメリカロマン主義と革命思想」

14:05-14:45 大宅由加利 (福岡大学・院) 司会：長岡真吾 (福岡女子大学)
「Ceremonyにおける自然とのつながりの認識——冷たい風とつながる Tayo」

14:50-15:30 小林 朋子 (鹿児島県立短期大学) 司会：吉田希依 (熊本県立大学)
「アフェクト経済のネットワークを創出する
——『タール・ベイビー』におけるホームとしての身体——」

15:35-16:15 鈴木 一生 (九州工業大学) 司会：大島由起子 (福岡大学)
「Herman Melville と反知性主義」

特別講演

16:20-17:20

成田 雅彦 (専修大学)
「旧牧師館と消された人々の記憶について
——ホーゾンと人種問題を考える」
司会 竹内 勝徳

総 会

17:25-17:45

KALS 賞の報告および授賞式

歓迎の儀

17:45-18:00

懇親会

19:00-21:00

会場 アートホテル鹿児島
〒890-0064 鹿児島県鹿児島市鴨池新町 22-1

大会会場横のゲートから送迎バス（20 名乗車可能）とタクシーで移動します。

参加申し込みは以下の URL より 4 月末日までお願いします。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSein7h6FVSxD16DgwZ0QzAUq8QR7Jm9o8uxWvEh_vgYzspgIQ/viewform?usp=sf_link

<第2日目> 5月14日(日)

シンポジウム

10:00-12:00

「デジタル・ヒューマニティと物語の交点」

- 司会・講師 岡本 太助 (大阪大学)
- 講師 矢倉 喬士 (大阪大学)
- 講師 森 瑞樹 (広島経済大学)
- 講師 長崎 励朗 (桃山学院大学)

閉会式

12:10-12:20 竹内 勝徳



テロと暴動——アメリカロマン主義と革命思想

高橋 勤（九州大学名誉教授）

2021年1月6日に起きた米国議会襲撃事件は記憶に新しい。民主主義国家アメリカのイメージを大きく覆す事件であったが、アメリカ文化・文学を研究するわれわれにとってこの議会襲撃は奇妙な既視感を抱かせる事件であったように思われる。というのも、こうした扇動と暴動のパターンはアメリカ史を通して頻繁に繰り返されたからである。民衆の扇動レトリックについては、すでにRichard Hofstadterの*The Paranoid Style in American Politics* (1965)に詳しいが、暴動やリンチについても文学作品にしばしば登場するモチーフである。同様に、従来民主主義の進展と「明白な天命」を展望する文学とされたアメリカロマン主義文学について、革命思想が時代の底流として潜在した事実を想定することは可能だろうか。アメリカン・ルネサンスと称されるロマン主義文学の背後に、国家を転覆させるようなテロと暴動のエネルギーが沸騰し、原理主義的思考に傾斜した革命的レトリックが醸成される土壌があったと思われる。そうした民衆のエネルギーが政治的大義の醸成と相まって南北戦争に突入する要因となったのである。この発表では特にソローの”Resistance to Civil Government”, “A Plea for Captain John Brown”を中心として論を進めたい。

キーワード

暴動、革命思想、アメリカロマン主義文学、ソロー

*Ceremony*における自然とのつながりの認識
——冷たい風とつながる Tayo

大宅由加利 (福岡大学・院)

アメリカ先住民作家 Leslie Marmon Silko は、その著作物の中で、自然を人間と同じ生命を持った存在として考え、人間はその一部にしかすぎないと描く。そして、人間が生き延びるためには、自然とのつながりの中で自分が生かされているという認識を持つことが重要であると表現する。

Ceremony (1977)の主人公 Tayo は混血のアメリカ先住民であり、第二次世界大戦からの帰還後で、生きる希望を喪失した状態にある。Tayo が、混血の先住民のメディシンマン Betonie の儀式や Ts' eh に代表される聖なる存在の助けを通じて、自然とのつながりを取り戻し、肯定的に生きる道を選んだことは先行研究で論じられている。今回の発表では、Tayo と風とのつながりに着目する。Emo に象徴される悪との最後の対決の場面で、風が吹く前後での Tayo の行動の変化を明らかにすると、Tayo の Emo への復讐心が風によって、クールダウンされたことがわかる。Tayo が、ねじ回しを握りしめ Emo に復讐しようとした時に、一陣の風が吹く。冷たさで Tayo の手がかじかむと同時に、Emo の仲間の帰還兵たちの争いが起こる。自分の手を凍らせるような風の冷たさやその動きに気づいた Tayo は、帰還兵たちが争う様子と周囲の自然に注意を向け、冷静さを取り戻し、復讐を思い留まるのである。風の存在に気がついた Tayo は生き延び、気づかなかった他の帰還兵たちは、風が煽った炎がきっかけとなり、悲劇的な方向へ向かう。同じ風が手を冷やしたり、炎を煽ったり、両義的に働く。Tayo の根幹には、自然の持つ両義性を理解し、自然と調和すべきであるという教えがあるが、それが彼を生き延びらえさせたということが、この場面からも言えることを示したい。

キーワード

Ceremony, nature, wind

アフェクト経済のネットワークを創出する
— 『タール・ベイビー』におけるホームとしての身体—

小林朋子 (鹿児島県立短期大学)

Immanuel Wallerstein による *The Modern World-System I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century* は、1974 年に刊行された。彼は欧米中心の資本主義経済を「近代世界システム」と呼び、相互に関連するシステムが全世界に広がっていくプロセスを約 500 年にわたる長期的な視野で論じた。彼は国家の成り立ちやその枠組みを、国家同士の内在的な問題とするのではなく、より広い範囲にわたる経済や人口動態との関連で捉えなおそうとした。Wallerstein の著作は、国家という単位や制度を越え、その概念に対して再構築をせまるトランス・ナショナルな世界観を提示しているが、Toni Morrison の主要な作品を概観すれば、その世界観が常にアメリカという国家を越え空間的・想像的な広がりの中で、柔軟な世界像を構築していることが分かる。作品の執筆当時である 1970 年代を時代背景とした *Tar Baby* (1981 年刊) の Jadine と Son は、「移動する」主人公として描かれている。特に Jadine は、最初は近代世界システムが構築した経済・商業のネットワークをなぞるように移動し、Son と出会ってからは、二人の新たな生活を実現できる場所を求めて旅を続け、最後にパリへ向かう途上で自らの身体に「生きられる場所」を見出す。この根無し草のような Jadine の移動経路は、上野が『ディアスポラの思考』で述べているところの、「近代＝現代社会内部に内在する亡命と離散という状態」として立ち現れているように思われる。本発表は、アフェクト経済の新たなネットワークを創出する可能性を生み出すファッション・モデルとしての Jadine に言及することで、Morrison の越境的な想像力の深遠を示すことを目的としている。

キーワード

Toni Morrison, *Tar Baby*, Immanuel Wallerstein, affect economy, body in motion, fashion modeling

Herman Melville と反知性主義

鈴木一生 (九州工業大学)

Herman Melville の作品には、知性よりも身体感覚にしたがう登場人物が度々現れる。奴隷船を題材にした “Benito Cereno” のデラーノ船長は、情には厚いが知的聡明さに欠けるがゆえ、サン・ドミニク号の真相、すなわち船内反乱を経た白人船員と黒人奴隷の主従関係の逆転になかなか気付くことができない。しかし、その知的な鈍さが結果的には黒人による暴力からの保身と船内からの脱出を実現する救済手段となる。これは、頭脳明晰であっても無残な最期を遂げる反乱の首謀者バボとは対照的である。また、メルヴィルの遺作となった *Billy Budd, Sailor* では、知性の際立つヴィア艦長と肉体性の優位が強調されるビリーの対比が鮮やかに展開される。ここでも、結末で救いを示唆されるのはやはり肉体的に優れるビリーの方である。あるいは、*Moby-Dick* に散見される知識人批判を鑑みても、メルヴィルが精神よりも肉体に主導権を与えようとしていたことは明らかであり、反知性的作家として捉えられるゆえんである。

アメリカ政治史の文脈から「反知性主義 (“Anti-intellectualism”)」なる語を生み出した Richard Hofstadter の *Anti-Intellectualism in American Life* では、反知性主義を Emerson、Whitman、William James、Hemingway らの反合理主義とは切り離して議論すべきであると主張する。ホフスタッターはメルヴィルの名こそ挙げていないが、これらの作家、思想家が反合理主義のラベルのもと一括して考察の対象外とされるがゆえ、文学研究の領域で反知性主義を捉え直す契機はまだまだ残されていると言える。国内の研究に目を向ければ、巽孝之が『反知性の帝国』において反知性主義を体現する作家の筆頭としてメルヴィルを挙げる。同書は、アメリカポストモダン作家 William Gass の論を援用しつつ、反知性主義の伝統に「簡潔性 (“simplicity”)」があることを指摘し、文化が「複合的にして簡潔明快なもの」であると確認する。メルヴィルにおける反知性主義を理解する上でも、こうした複合性/簡潔性が鍵になりそうだ。本発表では、複数の作品を横断的に精読することで、メルヴィルが描く反知性主義の姿を明らかにしてみたい。

キーワード

Herman Melville, Anti-intellectualism, simplicity

デジタル・ヒューマニティと物語の交点

アメリカ的思考法の特徴としてしばしば指摘される technological optimism (優れた技術によってあらゆる問題が解決可能であるという考え方) は、アメリカとその文学がアメリカそのものについて語る際にも、無意識のレベルで影響を与えていると言える。しかしながら、急速に発達するテクノロジーがマクルーハンの「人間の拡張」として歓迎される一方で、マンハッタン計画を主導したオッペンハイマーは「現代のプロメテウス」と呼ばれ、人間の傲慢さを象徴する存在ともなった。言うなれば、一見して楽観主義に彩られたアメリカの物語のダークサイドにおいては、テクノロジーは人間と対立するもの、あるいは人間が飼いなすべきものとして、人間らしさの概念を揺さぶり続けてきたのである。その最新のバージョンが、デジタル・テクノロジーと人間の関係をめぐる物語であることは言うまでもない。近年大学の研究領域として台頭しているデジタル・ヒューマニティーズは、数学的なものと人文学的なものという「二つの文化」(C・P・スノー)を架橋する試みであるが、デジタル技術の人文学への活用という楽観的な側面ばかりでなく、デジタル技術が人文に及ぼすネガティブなインパクトについてもまだまだ議論が必要というのが現状である。

本シンポジウムでは、デジタル技術全盛の時代における人間らしさ、つまりデジタル・ヒューマニティとは何か、そしてそれがいかなる問題や可能性を秘めているかを考えてみたい。アメリカ研究あるいは文学研究という制約に縛られず議論を行うために、今回は小説や演劇のみならず、ビデオゲームや音楽などの幅広いジャンルの事例を取り上げ、多角的なアプローチを行うこととし、それらを共通してくくる概念として「物語」を設定する。物語を創り出し、それを共有することにより豊かな文化や社会関係を構築できる点に人間が人間たるゆえんを見出すことができるとして、デジタル技術が今にもその人間らしさの牙城を突き崩そうという現在、私たちが自己に対して抱く自信は不安へと変わろうとしているのではないだろうか。あるいは、デジタルなものは人間的なものの外部にあるのではなく、物語る存在としての私たちの中に、もともとデジタルなものが存在していたとする見方もできる。デジタル・ヒューマニティと物語の交点に浮上する様々な論点について、時間の許すかぎり話し合ってみよう。

“You’ve almost convinced me I’m real” ——日米小説における人工知能と物語の生成

岡本 太助 (大阪大学)

機械的な音楽の創造を通して人間らしさの本質を追究した Daft Punk の楽曲 “Touch” は、機械が人間との接触の中で感覚・感情・自意識を獲得する物語と解釈することができる。機械が自身について語り、言わば物語を生成する過程が音楽的フィクションとして提示されるわけだが、人工知能による物語の創出が絵空事と言えなくなった現在、人工知能についてのフィクションから人工知能が語るフィクションへと、重点がシフトしつつある。本発表では、Richard Powers、瀬名秀明、長谷敏司、川添愛らの小説を横断的に比較検討し、人工知能と物語の生成の可能性とその問題点をあぶり出すことを目指す。

ビデオゲームを通してルーツを辿る

——ジャミル・ジャン・コチャイの短編集にみる 21 世紀的メディア環境下の小説のあり方について

矢倉 喬士 (大阪大学)

2022 年 7 月、アフガニスタン系アメリカ人作家ジャミル・ジャン・コチャイ (Jamil Jan Kochai) によるデビュー短編集『ハジ・ホタクの亡霊 (The Haunting of Hajji Hotak)』が刊行された。同短編集の最初に収録された短編は、小島秀夫監督による人気ビデオゲーム『METAL GEAR SOLID V: THE PHANTOM PAIN』を題材としており、ゲームコミュニティからも大きな反響を得た。短編集に配された他の作品では、ビデオゲームのみならず、Facebook や Instagram、そして YouTube といったイン

ターネットメディアを通じた日常を小説化するにあたって、様々な工夫が凝らされている。本発表では、コチャイの短編集を例に、昨今のメディア環境が小説に与えた影響を考察する。

創造的キュレーション——演劇界のアーカイブ化の現状と展望

森 瑞樹 (広島経済大学)

近年、American Theatre Archive Project のように、演劇やミュージカル作品制作に関わるあらゆるプロセスやそのアウトプットを蒐集し、アーカイブ化しようという取り組みが盛んになってきている。もちろんこういった取り組みは演劇の文化的遺産を後世に残すためのものであると同時に、その活用次第で人が持つ創造性を更に押し広げてゆくための素地を整えてゆくことにもつながっていくだろう。本報告では演劇界におけるアーカイブ化の現状や問題点を整理しつつ、いくつかの事例を交えながら、それらが作品制作に与えた・与えるであろう影響を探ってゆく。これらを展望することで、デジタルと共存してゆく演劇界の可能性にも言及できれば幸いである。

電子音楽とデジタル・ヒューマニティ——AI が映す人間的欲望とその帰結

長崎 励朗 (桃山学院大学)

近年のAI ブームにおいて、「AI に奪われる仕事」というトピックがしばしば取り上げられる。しかし、それらは「犬なのに挨拶をする」という程度の、人ではないものが「人らしき行動」をすることへの称賛や畏怖の域を出ない。

より本質的な議論をするためにはAI が「人間の欲望の忠実な反映」として機能している点に注目すべきだろう。それが人間や社会、そして芸術分野にどのような変化を生むのか、あるいは生まないのか。本発表では、ロックと電子音楽というかつて対立的に捉えられていた音楽表現の図式を文学とデジタル・ヒューマニティの対比と重ねながら、人とAI の相違点や関係性について考察してみたい。

旧牧師館と消された人々の記憶について ——ホーソンと人種問題を考える

成田雅彦（専修大学）

アメリカにおいて人種は常に重要な問題であったが、ここ数年のアメリカほど人種問題が理念に遡って根本的に問われ、国家形成の中核に位置する問題として論じられたことはなかったのではないだろうか。いうまでもなく私は、ニューヨーク・タイムズ紙が2019年に提示し大きな論争となった『1619プロジェクト』とそれに対抗するトランプの「1776委員会」、それに偉人像破壊運動や大勢の人間を巻き込んだBLM運動などのことを念頭に置いて言っているのだが、特に『1619プロジェクト』では、自由と平等を国是としながら奴隷制を維持してきた1776年発祥のアメリカは欺瞞であり、むしろヴァージニアに最初の奴隷が着いた1619年からのアメリカこそ現実のアメリカであったという、いわば、国の成り立ちそのものと人種が密接に結びついて論じられた。

私は、アメリカン・ルネサンスのとくにホーソンとカエマソンの文学を細々と研究してきたのであるが、こうした新たなアメリカ像が現れつつある現代に、アメリカのいわば黎明期を告げる文学隆盛の時代がどんな意味を持っているのかを考えることに興味がある。一般的に言って、アメリカン・ルネサンスの作家たちは、やはり1776年版のアメリカを継承し、その精神を謳い上げる白人優位を前提とした人々であったろう。特にニューイングランドでは、奴隷制と同時に大規模かつ激しい奴隷解放運動が大きな力を持ち、アメリカン・ルネサンスの少なからぬ作家たちもそこに身を投じて行ったのだから、彼らを白人優位主義者だとする見方には異論もあろう。それにも一理はある。しかし、彼らの文学はやはり白人中心主義を前提に創造されたし、それを無意識に強化する言説を創り出す側面があった。

今日の話ではコンコードの有名な旧牧師館（The Old Manse）にまつわるホーソンのエッセイ中のエピソードを皆さんと一緒に吟味することからはじめたい。それを検討することで、アメリカ文学の聖地であり、1776版アメリカ史観から見れば自由と民主主義の聖地であったコンコードの地層に何が隠されていたかを覗いてみる。それを糸口としてホーソンと異人種の間を考察してみたい。ホーソンは、奴隷制にもインディアン問題にもはっきりと明確な姿勢は示さず、保守的な思想を持った作家としてリベラルからは非難されてきた作家であったが、それは何故なのか。作家がひとつの人種観に行きつくには、個人の嗜好を超えて、その作家の置かれた社会的、歴史的制約や動機というものがある。ホーソンをひとつのケーススタディとして、アメリカン・ルネサンス期の作家がどのようにある人種観に辿り着き、かつそれとどのように対峙していくかを皆さんとともに考えてみたい。作家の筆先から生まれる人種像の必然ということにも言及できればと考える。